

はつとん weekly(校長室より③)

出合い

先日、初富が長年実施している東大見学会という希望者対象の行事がありました。今年度の高校修学旅行の行先の一つである、モンゴル国の大使館の訪問という東京への出張があったため、日を合わせて参加させてもらいました。

初日は、東大の本郷キャンパス見学から始まり、駒場キャンパスに移動し、東京大学の名誉教授野口潤次郎先生のお話を聴きました。大数学者から、中3から高2までの生徒に話をしてもらうというまたとない機会を得ることができました。先生は、初等的な話を丁寧にしつつご専門の紹介の入り口までお話しくださいました。

その前段で次のようなお話もしてくださいました。

○教育を受けている生徒たちは、失敗をしてもよいので、一生懸命に何かに打ち込むことが大切であるということ。

○何かをなすにはそういう時間が必要で、例えるなら、走るために、筋力トレーニングは必要だけれど、走っている時は忘れていいものだという事。

○学ぶということは、物の見方、風景、価値観が変わるということ。

○新しいものを判断するときは、自分の今までの経験が役に立つものだという事。

世界的にご活躍されている先生の、ご経験を踏まえた若い時期の学びの意味は、心に響くとても貴重なものでした。

その後、本校の東大に通っている卒業生とその友人の東大生に、グループに分かれて駒場キャンパスの案内をしてもらいました。

夜は、東京の大学に通っている卒業生が宿泊施設に集まってくれて、参加生徒と90分ほどグループに分かれてさまざまな懇談をしました。東大・東京外大・早稲田と優秀な先輩たちからいろいろなアドバイスや刺激をもらった時間でした。

二日目の午前中は環境省を訪問しました。一線で活躍されている官僚の方から、環境省の仕事、国家公務員というものについてのお話をいただき、その後国家公務員のトップの役職である事務次官との懇談を事務次官室で行いました。

和田事務次官はこの日をもって退官されるとことで、生徒たちにご自身のお名刺を配ってください、未来ある若者に向けて熱いメッセージをくださいました。特に印象的なお話は次のようなものでした。

○そこそこの選択はだめだ。それは何時か愚痴に変わる。なりふり構わず一生懸命するべきだ。もちろん超えられない壁のようなものが出てくるが、その時に大切なのは周りの人と話ができるか、そういう意味でのコミュニケーション力を持っているかが大切。そこそこの魔界はいつも横にある。

○このことは一生懸命頑張ってきたというものがあると、人生の中で芯となる。またそれ以外のことも、学校で学ぶようなことは、どれもおろそかにしない方がよい。社会に出てからさまざまな視点を持てるようになる。

国の第一線で働いておられ、それこそ天下国家の仕事をしている方と直に触れ合える機会を持つことは生徒たちにとって、なかなか体験できないことなのではと思います。

昼からは、リクルートの本社の訪問を行いました。ここでは、若手社員からリクルートでの仕事の話の聴き、さまざまな意見交換をする場を持つことができました。慶應大・東京大・国際教養大を卒業された方々で民間大手の若手社員の本音が垣間見える貴重な時間となりました。

10 代後半から 20 代前半の先輩、20 代後半から 30 代前半の若手社員、40 代の官僚、60 代の国のトップ官僚、70 代の世界的数学者、40 代から 50 代の引率教員と、今回の 26 名の生徒に関わった大人は 20 名ほどにも上り、しかも各世代の方々の協力を得られることができるという稀有な行事となりました。

選んだから体験でき、触れることができ、さまざまなことを考えることになります。この 2 日間が人生にとっての岐路になってもおかしくないほどの出会いがあったと思います。自分で限界線を引かず、勇気をもって自分たちの未来を切り拓いていって欲しいと思いました。

個人的には、東京出張の主目的はモンゴル国大使館訪問だったのですが、こちらの方は、公使と書記官に面会することができ、面会時間 30 分の間に現地に修学旅行本体が言った時の外務省訪問や事後研修での総領事館訪問などの提案をしていただきました。この修学旅行を毎年継続実施していき、若者の交流を元に、両国の友好につながればという大きな話になりました。短い時間ではありましたが、大変実りの多い時間となりました。